

新潮文庫

勝海舟

第一卷・黒船渡来

子母沢 寛 著



新潮社

かつ かい しゅう
勝 海 舟
第一卷・黒船渡来
くろふねとらい

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 153 E

昭和四十三年十一月三十日 発行
昭和四十九年六月三十日 二十二刷

著 者 子 母 沢 寛
し も さわ かん

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発 行 所 株式 新 潮 社
会社 新 潮 社

郵便 番 号 一 六 二
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)二六六五一一
編 集 部 (〇三)二六六五四二一
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

原
书
缺
页

原
书
缺
页

勝

海

舟

第一卷・黒船渡来

開眼

今日は、勝も、ずいぶん、みっちり身を入れて遣^{つか}って行^いった。肱^{ひじ}のところに血がにじんでいたようだ。

島田虎之助^{とらのすけ}は、師匠の男谷精一郎^{おたに}から、特に言葉があつて、自分のこの浅草新堀^{しんぼり}の道場へ来ている勝麟太郎^{かつりんたろう}という奴の、何処^{どこ}となく桁^{けた}の外^{はず}れたそれでいてちゃあーんと算盤^{そろばん}の合うような如何^{いか}にも妙な遣いぶり^{つかいぶり}が、今日はしみじみ氣に入^いった。

昼までで、門人達がみんな帰^{かえ}って行くと、道場は実に深閑^{しんかん}として終^{しま}う。虎之助は小さな庭のあの一と間^{いま}についた狭い縁側^{ひざ}で、膝^{ひざ}の前へ沢山木賊^{とくさ}を散^ちらかしながら、頻^{しき}りに櫛^{かじ}の木剣^{きけん}を磨^{みが}いていた。

眼を上げると、青い空が見えるが、丁度その庭の真ん中に、まるでこの青空を見せまいとでもするように、大きな榎^{えのき}の木が枝を張^はって、その若葉^{わがは}の匂^{にお}いが島田の着^きている木綿^{きぬ}の黒紋^{くろもん}付^つに染^しみる程に強^{つよ}かった。

陽ざしが、葉のすきをもれて、ちらちらちら木剣^{きけん}へ流^{なが}れて来る。

遠くから、飴^{あめ}売^うりの太鼓^{たいこ}の音が聞^{きこ}えて来^きた。と、一緒に、誰^{たれ}か、玄関^{げんかん}で

「御免^{ごめん}よ」

そんな声がしたような気がした。

師匠のお蔭で三軒つづきの長屋を借りて少し手を入れて二軒を道場に拵え、一番端の一軒へ自分住んでいるこの小道場は、近所隣も近いので、その客が、果して自分のところかどうかを、確めようとしている中にまたつづけて

「居ねえのかえ。え、おい」

と客は早口に云った。

虎之助が、——何んだ無作法口をきく奴だ——そう思いながら木剣を磨く手をやめた時には、もう、女房のいないこの道場のたった一人の内弟子の大野文太が、その客と応接している声が聞えた。

「勝だよ、勝の隠居だよ」

虎之助は、大野の取次ぎを待つまでもなく、直ぐに立つと、白い小倉の袴の膝の埃を払って、玄関の方へ出て行った。

「おう、おのし、虎さんかえ」

麟太郎の父、勝小吉が、土間に立っていて、声をかけた。

虎之助は、一寸言葉が出なかった。

小吉は、月代の延びた頭に、腰までの黄色い短羽織を着て、女のようなしやれた小紋袴の着流し。上前の裾をちょいとつまみ上げているが、そこから緋縮緬の長襦袢が出ている。素足に雪駄、これを爪先に半分程も突っかけて、しかも、腰には、おもちゃのような短い木刀が一本。「倅がいつもいつも世話になり、心の中では有難えともうれいとも思っているが、どうにも埒

くちもねえくらし故、思いながらも無沙汰ぶさたをしたが、まア許しておくれよ。今日は、それや、これや、礼にやって来たという訳よ」

虎之助は、作法正しく手をつかえた。

「むさいところで御座いますが、どうぞお通り下さい」

小吉はうなずきながら

「御免よ」

気軽く上がって来た。

大野は、眼をくるくるしていた。年はまだ二十六だが、師匠本所亀沢町の男谷精一郎を除いては、先ず江戸随一とさえ噂うわさされ出している島田の道場へ、これはまたなんというべら棒な来客だろう。

ひと間へ通って、小吉は、まじまじと島田をみていたが、

「おのし、男谷の道場では、滅法かんしゃくの虫を立て、みなみな痛い目に逢わされるというが、こっちでは手軟らかか倅も毎日無事にけえって来るね。もちっと、みしみし遣ってくれるがいいじゃあねえかえ」

「は」

島田は、逆らうまいとしているようであった。小吉は、師匠の叔父おじである。掛違かちがひっていて逢うのは今日がはじめてであるが、三十七の若さで、小普請こやくの身が隠居をさせられた程の人間である。小吉は幼名で、本当は左衛門太郎、隠居して夢酔むすいと名をかえたが、誰一人、左衛門太郎とも

夢酔とも云わない。

「ところで、どうだえ、倅は、物になるかえ」

「は？」

「男谷は、口がうめえから、何事も修行次第よなどと抜かすが、おのしは、まだ、九州から出て来て幾年にもならねえ故、江戸前の口うまにはなるまいから、おきき申すのだ、どうだえ鱗太郎は」

島田は太い眉を少し上げた。そして、睫毛の濃い大きな眼を真つ正面に見すえて

「わたくしが申すまでもなく、あなた様は、すでに御存じの事と思ひますが」

「いや、それがさ、親は馬鹿さ、子にはあめえよ、他人の事はわかつて、おのが子の事はわからねえものさ」

「しかし」

「云っておくれよ」

島田は少し黙っていた。そしてなお眼ばたきもせず小吉の両眼を睨むようにしたまま

「剣術遣いにはなれません。剣術遣いになる剣術ではありません」

「ふむ？」

「それだけです」

小吉は幾度も幾度も、まるで、おもちゃの虎が首をうごかすようにうなずいた。そして「さすがだねえ、おのしは」

といった。それから、双方、なんにも云わなかった。

飴売りの太鼓が、道場の横辺りへとまって、いつまでもそこで叩たたいている。

「うるせえなあ」

小吉は、そうだったが、島田は、やっぱり口をつぐんでいる。怒っているかな、小吉は腹の中
でそう思った。

「先生」

と、島田は少し重く口を切った。

「わたくしは、田舎いなかもので、江戸の事は一向にわかりませんが、どうも、江戸の武士は、風俗も
悪く、服装なども、まるで女のような人間なども居り、青痰あせたんでも、吐きかけてやりたいと思いま
すが、先生は、どう御考えなさいますか」

島田は、さっきから、じろりじろりと、頭のとっぺんから爪の先まで、小吉の風態を見ている
のである。小吉は、ふふんと笑った。そして

「おいらの姿なんぞも嫌きらえかえ」

島田は、何にも云わずに横を向いた。

小吉に、いろいろなわるさを仕掛けられて潰つぶされた道場が江戸には幾つもある。しかし、島田
はそんな事などは、びくともしない。が、ただ、師匠の叔父である、それだけで、師匠に対する
と同じ態度を忘れまいと努力した。

「先生は別です」

こういつてのけて、島田は自分でも、ほっとした。

小吉と、島田が連立って、道場を出たのは、それから半刻ばかりの後であった。もう七つ時分を過ぎていた。

小吉が、島田は酒を飲まないといったら、それなら浅草に甘いものがある、初対面のちかづきに、そこまで御苦勞を願いたいと、無理矢理引っ張り出して終ったのである。

「葺はどうだえ？」

「修業中故喫みません」

「ふふーん。そんな事でどうなるえ。葺ぐれえに敗けるようじゃあ江戸の修業は出来ねえよ。それより、ほうら見ねえ、あすこに女が来る、いい女だろう。え」

「そうですね」

「あんなものだって、恐がっているようじゃあ本当の修業は出来ねえよ。おのし達は、堅くなつて、こちこちに成るのを修業だとばかり思っているよ。そんな事じゃあ真物の人間は出来ねえね」

「は」

小吉は、女の方へ手招きをした。新堀端浄念寺の築土塀の前であつた。

「おい。馬鹿におめかしをして、何処へ行くえ」

「ああら先生」

二十一、綺麗な女だ。にこにこ顔で小吉の前へ小走りに寄った。

「虎さんや」

と小吉は島田を見て

「こ奴^いあね、浅草の奥山にいる水茶屋の女だが、これでいいところのある奴だ。亭主と云うか情夫^ろというか、そ奴^{きん}が巾着切^{きんちやくきり}でね、こ奴^いもいくらかはやるらしいが」

「まア、先生、飛んでもない、あたし、知りませんよ」

「お白洲^{しろす}じゃあねえんだ。知ってる^しと云ったっていいんだよ。おれどもあ、これから、あっちへ行くところだ、お前^{まへ}先へ行って、いい女をずらりと並べて置いてくれろ」

「ほんとでござんすか」

「本当だよ。この方^{かた}あな、島田虎之助とおっしゃる江戸一の剣術遣いだ、怖^{こえ}えんだぞ、粗相のねえように——いいかえ」

女は、うなずいて、改めて島田へ一礼すると、とつと、行って終った。

丁度その女とすれ違いに、四十がらみの侍が、みんな二十二三の若い侍を五人つれて、同じ堀端^{とうぜんじ}の、東漸寺^{とうぜんじ}前の、駄菓子屋からぞろぞろ出て来るのと、小吉は、ぼったりと顔を合わせた。

「小吉だっ！」

誰かが叫んだ。忽ち^{たちま}六人はまるで焰^{ほのお}でもかぶった時のような、興奮に駆り立てられた。年上の一人が、つつとみんなの前へ飛出して来た。もう刀の標^{つか}へ手をかけている。

「小吉、前へ出ろっ」

しかしその小吉はにやにやしながら島田を振向いた。そして小声で「今、喧嘩^{けんか}を見せて上げる。面白いものだ、御覧よ」

小吉は対手^{あいて}へ向って行くと共に、羽織を脱ぐと、さっと島田の方へ投げて寄こした。そして、

それと同時に、一番先の奴へ、組みついて行つた。それが悉く、瞬きをする間もない素早やさである。

小吉は、左手で相手の鬚すけつぶしを驚おどづかみにして、こっちへぐんぐん引つ張つて来ながら、右手にはもう相手の刀を奪い取つて、その峰で、相手の背中を叩きつけて

「真っ昼間、生くらなんぞを振廻しやがって、大べら棒奴め、師匠の面汚つらよごしたあうぬが事だ」
怒鳴りつけて、さて一段と大声で

「島田虎之助先生、こ奴らあ、みんな割下水の近藤弥之助先生のところの弟子さ。馬鹿ばかりで、こうして往来で、喧嘩を売る、いや飛んだ滅法界者めつぽうけいさだ。ちょいっと片づけて、直ぐに行く故、先生は、一足先に奥山のさっきの女のところへ行つて、おくれよ、蛇の目屋ときけあすぐにわかるから、え」

勝

海

舟

こういうと、またぐんぐんと相手を押して、外の奴らの方へ出て行つた。みんな刀をぬいたが、今島田という声をきいてぎっくりした様子である。

「さ、来ねえかよ、小吉が喧嘩の仕口を、手を取つて教えてやる」

島田はすっかり閉口して終つた。もう、一ぱいの人だかりになっている。真っ昼間、緋縮緬の長襦袢を着た侍が、暴れている、それが自分の連れと見えるさえ気まりが悪くて堪たまらない。といつて、このまま行つて終うことにも行かない。羽織を持たされてほんとに閉口している。

小吉は、またこっちへ戻つて来た。そして、つかんだ相手を不意にぱつと押放して、よろよろと泳ぐように逃げて行くうしろから、さっと、一太刀軽ろく浴びせた。

相手は襟えり首から袴の下まで斬り下ろされた。しかし、それは、着物も帯も袴も斬り割られ

て、対手が殆ど、素っ裸になって、ひどく狼狽している醜態を其処に投出しただけで、別に一滴の血も出なかった。

「先生、え、是非お初のつき合いに御馳走がしたいのさ。先に行っていておくれよ」

そう、もう一度、島田を促すと、また、敵中へ戻って行った。刀をこうふりかぶって

「どうだえ、見ろよ、小林隼太の褌は、めっぽう汚ねえじゃあねえかよ」

着物を斬られた小林は夢中になって逃げて行く。若い侍たちも、もう、小吉の科白などはきいてはいなかった。どんどん逃出していた。

「おう、刀あ要らねえのか、刀あよ」

小吉は、にやにやしながら、呼んだが、振向くものもなかった。お寺の前の、帯を敷いたような堀っぶちに、今の小林の着物や帯が、散らばって残されている。

小吉は、その上へ刀を投り出して

「これで喧嘩もやりつけると面白いものだよ、段々味が出て来るからね」

そう島田へいって

「連れが島田虎之助と聞いて、あ奴らあ、ふっ飛んで終ったよ、虎さん、おのしや江戸の鬼神だね」

島田は苦虫を咬み潰したような顔をして、黙っていた。

如何に四十俵の小祿で、不身持ちで隠居をさせられるような人間とは云いながら、これでも徳川の御家人、直参である。かねて噂にきいてはいたが、余りひどい。こんな処でこんな喧嘩をする

のは市井の小無頼にも劣るではないか。この人が、かつては直心影近世の偉人と云われた藤川弥司郎右衛門の年回忌に六百人近い参会者の試合行司を勤め、下谷車坂の井上传兵衛の年回忌にも勝負検分をした。殊には師匠男谷の道場開きにも取締行司を勤めたときが、実に意外な話である。こうして見ると江戸の剣客の正体などというものも大抵底が知れているような氣もする。

島田は、自分の師匠の叔父だなどとは信じたくない氣持であつた。
「どうだえ」

小吉は平氣なものである。たった今の喧嘩などは、けろりと忘れたような顔つきで預けた羽織を受取りながら、

「勝は貧乏で、倅が、おのしの世話になつても、何一つの貢も出来ねえ。喧嘩なら資本がいらないこと故、いつでもお目にかけられると云うものさ。え、おのしの国の九州辺りでは、こんな喧嘩あなかなが見れねえだろう。今の奴あね、あれで近藤さんところの目録だよ、とんと埒もない腕前さねえ。北割下水の能勢の妙見さまの講金の事で、おいらを恨んでいやがって、あんな喧嘩を仕掛けたが形もねえわさ」

まるで他人事のようにして先に立つて、門跡の方へ向つて歩いて行く。

島田は、何処で、どんな口実を設けて、なんといつて、別れよう、そればかりを考えて、もう小吉の言葉などは少しも聞いてはいなかった。

青い空には、いつの間にやら、薄靄のようなものが、かかっていた。
春である。

新堀の水色は、乳色に光つて、浄念寺前の辺りから薬師、抹香、こしやの小さな橋々が、北へ

北へと並んでそこへ静かな影を投げ落し、寺の堀、町家の屋根もそのままうつし絵のように水に映っていた。

小吉は、俄かに少しどぎまぎした。

「ええ、これあいけねえよ。倅が向うからやって来やがった。なんだってまあ、今頃こんなところへ来たものか——虎さん、実あおいらあ、倅がとんと苦手さ、あ奴ああれで、おいらに輪をかけた癪癪持ちよ、この、おやじどのの風態を見たら、何をやり出すか知れねえ故一寸の間、姿をかくそう。え、おのし、知らぬ顔で、一步先に奥山へ行っておくれな。え、間違えなく、え」

小吉は、島田の返事をきく間もなく、あわてて竜王寺の墓所の方へふっ飛んで行って終った。

島田は、ほっとした。まるで有難い救いの人に出逢ったような心地であった。

如何にも、勝麟太郎が、堀を越えた向い側の、小さな旗本屋敷の、黒い堀の前をこっちへやって来る。大切そうに包み物を抱えている。書物のようである。

島田は手を上げて、勝、勝と呼んだ。その声は聞えなかったかも知れないが、麟太郎はすでに島田の姿を見ていたらしくすぐ駆け足で、抹香橋を渡ってこっち側へ来た。

今の騒ぎを知っているのだろうかと思ひながら、島田は、勝が、何かいうのを待った。が、勝はまだ人だかりがあって、中には、こわごわながらすぐ鼻ツぱしからじろじろ島田の方を見ている人などもいるのに、そんなことは眼にも入らぬ風で、丁寧にお辞儀をしてから、

「どちらへ、お出ましでございますか」といった。